Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2003, Vol. 50, 29 − 47.

「私」への「なぜ」という問い—自我体験—に関する概観と展望

天　谷　祐　子[1)]

はじめに

「私とは何か？」「私という存在はどこから来てどこへ行くのか」といった問いは，哲学や宗教学等で古来から多く取り上げられてきた。心理学においても，このような問いを発端に様々な研究や考察が積み上げられてきたと言えよう。しかし「私とは何か？」と一口に言っても，この問いは，常に同じ内容を問うている普遍的な問いではなく，その問いの指し示す水準や内容，問いの意味は異なってくる。柏木（1996）は，「自分とは？」と問われれば，誰もがいつでも答えられる自明のものであると同時に，非常に深い哲学的な問いでもあるとしている。よって，人によってきわめて単純な答えから複雑で高次な考察までさまざまであると述べている。榎本（1999）も“「自分とは何か」の問いに対してはさまざまな答えを見つけることができる。しかしこの問いに真正面から答えることは不可能に違いなく，永遠の問いと言ってよい”と述べている。そして，“自分の解明，自己の探求というのは，哲学や宗教ばかりでなく，心理学でも重要な一領域を構成すべきである”と述べている。本論文はある水準の「私とは？」という問いに対し，心理学的観点からアプローチするものである。

本論文で特に注目する水準の「私」への問いは，以下のような現象として発現してくるものである。

事例1：宇宙が現実とまったく同じ歴史的経過を辿ったとして，そのときそこでその両親から生まれ「永井均」と名づけられた人間は，私でないことも可能であった。だが，なぜかそれは私であった。なぜ，それが私であったのか，そしてなぜ，他の人間が私ではなかったのか，それはまったくの謎である（哲学者の永井（1998）が小学校高学年の頃から漠然と抱いていた問い）。

事例2：私が生み出され，今ここに存在しているということは，まったく奇跡的な出来事だ，ということである。ながく続いた，これからも続くであろう人類の歴史の中で，なぜか私は，二十世紀の後半というこの時期に，そしておそらくはこの時期だけに存在している。私は十三世紀にも，二十三世紀にも存在することができたはずだし，いかなる時代にもまったく存在しないこともできたはずである。だがしかし，私は誕生し，今ここに（だけ）存在している，これは驚くべきことではないか（事例1と同じく永井（1991）が抱いていた問い）。

事例3：私は本当に三浦裕子なのだろうか？確かに人は私のことを“裕子ちゃん”とは呼ぶけれど，私は本当に三浦裕子なのだろうか？私のまわりの人は，私の中に三浦裕子という人間の存在を認めているかもしれないけれど，私は自分の中に私という存在を感じることはできても，三浦裕子の存在を感じることはできない。私は私であり，その私は確かに三浦裕子である。それは確かにそうなのだけれど，しかし，私が私であると感じる“私が”の私と，三浦裕子であるということとはどうしても結びつかない。なんだか変だな（梶田（1988）のゼミに属していた女子大生が20歳の時点で小学校5，6年の頃を振り返った文章の一部）。

この3つの事例以外にも，例えば哲学者の中島（1991）は永井（1986）の著書に出会い，自身の抱いていた問題を論理的に表現していると感じたという。それまでは，そのような類の疑問を掲げて議論を進める自己論の書物を読んでも，自己の構造や成立条件に関する議論しか行われておらず，ある物足りなさ，もどかしさが残っていたと述べている。また心理学者である鈴木（1992）も，高校の頃に取り組んだ「私」に関する問いが，永井が問題としている問いとまさに同種のものであることを指摘している。鈴木（1992）はこの「私」に関する問いについて，「これこそが自分の究極のテーマだ」と思い，この問題を解決したいがために心理学研究の道を選んだと言っても過言ではないと述べている。これらの例の他にも，同様の水準の「私」への問いが，哲学を専攻としない大学生のレポートの中や，作家の自伝や作品の中に数多く見られることを渡辺（2002）が指摘している。

この3つの事例で挙げられたような水準の問いは，哲

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

学者や心理学者だけでなく，一般の人にも数多く見られる問いのようである。そしてこれらの問いにおける「私」の水準は，どれも日常的に使用される「私」という表現とは異なる水準である。それは，例えば「他の人とは異なる唯一の私」「私の独自性」「私の自己規定」といった水準を超えたところに，仮定として設定された「私」の水準であると思われる。そしてそのような「私」に対して素朴に問いを持ち，不思議さや違和感を感じているものと思われる。本論文では，この水準の問いで問題とされる「私」について明確化した上で，心理学において実証的研究を行うための位置づけを行う。

1.「問い」について

冒頭の3つの事例に見られるように，本論文ではある種の「問い」に焦点を当てている。「私」についての議論の前に，本論文の「問い」そのものに対する位置づけを明確にしたい。

(1) 哲学の分野における「問い」

飯島（1992）は，哲学がものの考え方の基本として土台に据えるのは，ごく単純な日常的な事実であると述べている。“日常的な事実で誰もが当たり前のこととして，何も怪しむこともなくすませていること，それに疑問を抱き，なぜそうであるかと問うてみる。問うてみることによって，一つの新しいものの考え方が得られることがあり，その考え方でゆくならば，世界全体がかわってくるほどの大きなものの考え方に育ってゆくこともある”と述べている。

西（1996）は，自分が存在していることそのものに対して，普通は誰も答えを出せないと述べているが，この種の問いには明確な答えは存在しないと述べている。よって，この問いに対してはどのように自分で折り合いをつけていくかということが問題になると思われる。池上（1994）は，「自分とはなんだろう」という問いへの対処の形は，いくつかにわかれると述べている。そして“それ以上自分とはなにかを問おうとしない者，自らを無ととらえる者，問おうとするが手近なところにある既成の答えで満足してしまう者，徹底して問うあまり世界との関係そのものが修復不可能にまでなってしまう者”を挙げている。

本論文においては，「私」への問いに対して答えを見出すという視点や，このような二元論的な問いの立て方そのものが仮定的であるとか間違っているとかといった視点は問題としない。当然とされていることを当然と思わずに，まず驚き怪しむということが哲学のはじまりだとよく言われる（飯島，1992）。本論文においては，無自覚に当然だと思っていたものに，一般の人が改めてどのように問いを持つかという点に特に注目するものである。

(2) 子どもの問い

冒頭の3つの事例に見られるような問いは，いわゆる“子ども”時代に相当する児童期後半に主に出現する現象と思われる。永井（1991, 1998）の事例は小学校3年から中学2年頃，梶田（1988）の事例では小学校5・6年の頃と報告されている。Jaspers（1949，草薙訳，1954）も“人間は人間である限り，根源的に哲学するものであるという事実を示す驚くべき証拠は，子どもによって発せられる問い”と述べ，いわゆる“子ども”の時期に哲学的な問いが出現することを指摘している。さらに池上（1994）も，“子どもの頃，自分（自己）とは何かという問いに辿りついたはずだ。それなのに，我々はいつの間にかこの問いを忘れて生きている。いや，無理やり目を背けてきたというほうが真実に近い”と述べている。

また永井（1996）は，子ども時代の問いと青年に見られる問いを区別している。青年の哲学の根本問題は人生，つまり生き方の問題であるが，子どもの哲学の根本問題は存在であり，自己を含めた森羅万象が現にこうあるということが不思議で納得がいかない。それによって何が変わるわけでもないが，純粋に知的な問いを全身全霊を傾けて発すると述べている。そして永井（1996）は冒頭の自身の事例で挙げられた問いが子ども時代の問いであると述べている。

永井（1996）がある種の「私」への問いによって何が変わるわけでもないと指摘する一方で，村井（1992）はこのような問いに取り組むことによって，発達の契機が生まれるとしている。村井（1992）は“自明性，暗黙の前提と考えていたものが意識され，それらに疑いが生じたとき，発達の契機が生まれる”として，疑うこと，問うことの重要性を指摘している。また溝上（1999）は，本論文における「私」への問いに関してではないが，青年期の自己の存在意義や人生の意味に関する問いについて，“これらに答えを出さずとも現状の生活には直接問題はないが，いったん悩み出した以上解決しないことには，前へ進むことはできない”と述べている。溝上（1999）は，これらの問いは表面的には抽象的であるが，内実は未来の自己のあり方と絡んでくるものとしている。

このように，本論文におけるある種の「私」への問いは，子ども時代特有の問いの形であり，表面上はそれによって何が変わるわけでもないと思われるものである。しかし，問いに取り組むことで発達的契機が生まれる可

能性もあるものと位置づけられよう。

2．「私」に関するレビュー

「私」「自我」「自己」といった言葉は，分野によって，また文脈によって様々なものを指し示す。梶田（1988）は，“「私」ということが，必ずしも一定の何かを指し示すわけではない。時と状況に応じて，「私」としてとらえられる領域や機能，「私」を特徴づける本質的属性は異なってくる”と述べている。そしてこのような「私」の多面性・多義性のために，心理学や社会学，哲学等における「私」「自我」「自己」の概念内容についても，様々な混乱を余儀なくされてきたことを指摘している。本論文においても，ある水準の「私」について検討する必要上，哲学・心理学における「私」「自我」「自己」の指し示す内容に関して整理を行い，その位置づけを明確化する必要がある。

また，「私」についての水準を検討するにあたり，哲学で議論されているものと，心理学で議論されているものでは異なることに注意したい。例えば，大辞林の「自我」の項には“①（哲）自分。自己。個体の意識や行為をつかさどる主体としての私。対象（非我）・他者（他我）から区別されるが，他我もまた一個の自我である。人格や作用の中枢として，認識の根拠・道徳的行為や良心の座となる。②（心）ア．自分自身に関する主体としての意識の総体。主我意識。イ．精神分析で，イド・超自我と共に人格を構成する心的領域。”と記述されており，哲学の分野と心理学の分野で問題となっているものが異なることを端的に示している。

(1) 文法的な「私」

まず「私」「自我」「自己」に関する文法上の整理を行う。文法学的に「私」「自我」「自己」の概念規定を検討してから論を進めているものに，哲学の分野において飯島（1992），心理学の分野において木村（1983），溝上（1999）のものがあげられる。

最初に，英語におけるselfについて，飯島（1992）は，我のselfもあれば汝のself，彼の彼女のselfもあると述べ，「それのそのもの，その人の持ち物，その人，そのこと，それ自身」を指すとしている。そして“他の人はいざ知らず，私個人は私自身は，という言い方で，良くも悪くもそれ自体というものに焦点を合わせる言い方で使われる”としている。溝上（1999）は，oneselfの強意用法は自他分別の働きをもち，self-も自他分別的な意味として用いられると述べている。そして，英語におけるIについては，人称代名詞の主格であり，行為の主体を示す。ドイツ語ではich，ラテン語ではegoがそれに相当する。そしてmeは人称代名詞の目的格であり，「私」が行為対象あるいは客体であることを意味する（溝上，1999）。これらから溝上（1999）は，IやmeはIは“「私」が「私」以外と何らかのかかわりを持つときに初めて客体・主体”と言え，行為する文脈でIやmeを用いることができると述べている。そしてselfは，「他の人ではなく私である」という文脈で用いられると指摘している。

次に，日本語における「自己」について木村（1983）は，「自己」の「己」は「自分自身」の意として多く用いられるとあり，溝上（1999）も，「己」が自他分別を文脈とするselfと非常に近い意味を持っているとしている。「自我」の「我」について溝上（1999）は，当初は目的格に用いられたとされるが，その後格支配は混同されてどの格にも「我」が用いられるようになったとしている。「自」については，木村（1983）はもともとは「発端」「起源」「基き出でたる根源」を意味し，「おのずから」「みずから」の意味があるとしている。溝上（1999）は「我」に「自」を加えて「自我」となると，「我」から出発してものを考えようといった意味になってくるから，egoやIといった主格的な性格をもつと述べている。これらから溝上（1999）は行為主体を「自我（ego）」，自他分別的な経験体を「自己（self）」，知られる客語としての「私」を「客我（me）」として用いることを文法学的観点から導いた。

そして日本語の口語における「自分」については，木村（1983）は「分有」の直接的表現であると述べ，溝上（1999）も他者と分担，あるいは配分されて自らにあるという意味で用いられるとしている。飯島（1982）も全体の中の部分，一つのものを分けるというところからある「持ち分」という意味合い，身分的な意味合いが含まれていると述べている。また「私」については，「公」に対する語で，公私の対立の中での言葉である（飯島，1982）。溝上（1999）も公に対し自分一身（だけ）に関する事柄を指す場合に用いられるとしている。「自分」と「私」という言葉には，社会的文脈によって成立する「自我」「自己」といった意味合いが含まれているようである。

以上のように文法的な面で「私」「自我」「自己」等の用語の概念的区別がある中で，冒頭の3つの事例における「私」の水準は，「自我（ego）」の問題と思われる。これらの事例では社会的文脈や行為する文脈などが関わらない水準における，主体に関するものを扱っていると思われるからである。自他分別の意味である「self」に対する疑念に属するとも一見思われるが，問いの本質は他者との区別にあるのではなく，「なぜ私が○○なのか」

という主体としての私に焦点づけられた問いであると思われる。

しかし，本論文で取り上げる「私」の水準をあえて「私」という言葉で表現したうえで検討を進めたい。本論文でとりあげる「私」の水準は，冒頭の事例でも挙げられたような，体験においてみられる「私」という実感を重要視するからである。中島（1991）は，哲学の立場から，「私」という語は他の人称代名詞との相対関係を前提としているのだから，私と言った時にはすでに自他の区別の知が含まれていると批判されがちなことに対し，“問題となっているのは私という語で呼ばれている周知のあの実感のことであり，それが私という語で呼ばれているのはこの実感にとっては偶然的なことだ”と述べている。つまり，私という語で呼ばれるようになった経緯を問題にする際には他者との関係が入り込んでくるが，その元になっている実感そのものに他者との関係が入り込んでいるわけではないということである。本論文でもこのような立場に立ち，以下「私」という口語的な表現を使用して議論を進めることとする。また，本論文で扱う現象は，後述するように心理学と哲学の分野にまたがる水準での「私」という性質を持つので，哲学の分野における「自己」「自我」と心理学の分野における「自我」「自己」の指し示すものの食い違いや，心理学における「自我」「自己」研究に見られる概念的混乱を避ける意味で「自我」「自己」の表現を避ける意図もある。

(2) 哲学の分野における「私」

哲学の分野では，外界や他者との関わりにおける「私」の水準を考察の範囲に含めない思考がなされる。中村（1989）は，自我について“認識し意欲し行動する主体が，その主体それ自身を外界や他人と区別することがなされる。その場合に，その主体は外界や他人と対立するものと考えられる”と説明している。そして自己については“外界や他人との関係を考察の範囲に入れないで，認識し意欲し行動する主体だけを，考察反省の対象とすることも可能である。この場合に，客観化されたために，考察反省の対象となる主体を自己と名づける”と説明している。哲学で考察の対象となるのはしばしばこの「自己」であると述べている。

①デカルトによる「私」

冒頭の事例で問題となる水準の「私」を含んだものとして，デカルトによる「私」が挙げられる（永井，1998）。デカルトは疑わしいものはすべて疑うという「方法的懐疑」を遂行し，こうやって疑ったり考えたりしている私の存在，これだけは疑い得ないとした。そして「われ思う，ゆえにわれ在り」と述べた。このデカルトの「私」について永井（1998）は，“たまたま自分自身であるところの一人物でもなければ，誰にでも備わっている自我といったものでもない，＜私＞の存在”について述べたものと解釈している。そして「われ思う，ゆえにわれ在り」について，“存在を疑いえない「私」とは，「私」一般（各人にとっての自分自身をさす指示作用）ではなく「この私」（デカルト自身にとってのデカルト）ただひとりでなければならず，しかもそれはデカルトという一人物（万人にとってのデカルト）ではなかったはずだ”と述べている。

入不二（1988）も哲学の分野における「私」という語の用法や「私」そのものに関する議論を「一人称問題」と呼び，デカルト的自我について議論している。その中で特に問題として挙げているのが「この（論文中では傍点が添付されている）」である。“この私も，他のものにとっては，ある「この私」にすぎないが，私にとってはそうではない。ある「この私」ではなく，この「この私」であるという他はないだろう。”“私にとっては，この強い再帰関係が存在しなければ，この私は，ある一人の「私」になってしまう。しかし，それは，私にとっては，私が消失することである”と述べ，この私にとっては「私（この私）」の同定の問題は存在しないとして，デカルト的自我は「この私」の次元＝独我論的場面で問題となることを示唆していると指摘している。

またデカルトについての言及ではないが，柄谷（1986）も，哲学において「この私」に関する検討の重要性を指摘している。柄谷（1986）は“十代に哲学的な書物を読みはじめたころから，いつもそこに「この私」が抜けていると感じてきた。哲学的言説においては，きまって「私」一般を論じている。それを主観といっても実存といっても人間存在といっても同じことだ。それらは万人にあてはまるものにすぎない。「この私」はそこから抜けおちている”と述べている。

以上の永井（1988）や入不二（1988），柄谷（1986）の主張する意味での「この私」＝デカルト的自我について，永井（1991）は特に＜私＞という表記をしている。永井（1991）の＜私＞とは，“その人物の持ついかなる性質とも独立に成り立つ事実”であるとしている。“ある人格を他の諸人格から分つものは身体や記憶をはじめとするその諸属性の差異であるが，＜私＞を分かつものは属性上の差異ではない。今たまたま＜私＞である人物は，身体の時空的連続性も精神の意味的連続性も断ち切ることなしに，＜私＞でなくなることができる”と説明している。そして森岡（1994）は，永井の＜私＞を「独在的存在者」として，4つの原則を述べている。“原則1：独在的存在者とは誰のことであるかを，固有

名詞によって指示することはできない。原則2：独在的存在者とは何であるかを，明示的に語ることはできない。原則3：独在的存在者が何であるかを，把握することはできる。しかしそれを把握できる人はひとりだけでなければならない。かつ，そのひとりの人が誰であるかを，固有名詞によって指示することはできない。原則4：独在性とは何であるかを，明示的に語ることはできる。”としている。

②霊魂説と＜私＞

ところで，霊魂説について池上（1994）は，“自分の消滅ということを考えて，世界と交流できなくなることが恐ろしいという点から，我々は身体とは独立な魂なるものを案出し，それによって世界との交流を死後にも確保しようとしてきた”と述べている。また永井（1998）は霊魂説を“死後身体を失い，この世での記憶のすべてを失っても，非物質的な材質からなる霊魂の持続ゆえに，来世においてなお同一性を保てる”学説としている。そしてこの霊魂説は，現代においても一般の人の間で根強く見られるとやまだ・加藤（1998）が指摘している。やまだ・加藤（1998）は“ほとんどの民族が，生物的な死によって人間の生を終らせず，「霊魂」や「死後の世界」という観念や宗教を発達させてきた。現在でも，そのような世界観は民衆の習俗や素朴概念として根強く存続しているのではないだろうか”と述べている。

このような霊魂説と永井（1991）による＜私＞はどちらも，身体とは独立な魂を仮定するという点で類似している（永井，1991）。中島（1991）も永井の＜私＞と霊魂説について，“通常の意味で生きている限り，＜私＞は同時につねに「私」でもある。「私」を離れたものとしての純粋な＜私＞について語ろうとすることは不可能であるはずである。この不可能を承知で，あえて純粋な＜私＞についてポジティブな意味で語ろうとするのが「霊魂説」である”と述べ，両者の類似点を指摘している。また，デカルトの物心二元論そのものが既に，身体が滅びても魂は不滅だとするキリスト教の「霊肉二元論」に深く影響されているという指摘も見られる（西，1998）。

しかしその一方で，両者の間に決定的な違いも見られる。永井（1991）は“霊魂説は本来唯一者であり，隣人をもたない＜私＞を複数化した学説である”としている。

以上のように，冒頭の3つの事例に見られる「私」の水準は，哲学の分野においては，外界や他者とのかかわりにおける水準をその範囲に入れない「この私」，永井（1991）による＜私＞に相当し，デカルト的自我に含まれ，「霊魂」概念との類似点と相違点が見出された。

(3) 心理学の分野における「私」

冒頭の事例で扱われた水準の「私」について，哲学の分野においては永井（1991）による＜私＞の水準がそれに相当することがわかった。しかし心理学においては，それに相当する理論はあいまいなままであるのが現状である。その理由として，心理学の分野における「私」についての理論的議論が混乱しており，混乱したままの状態で，「私」に関する実証的研究が多くなされていることが挙げられる。この点について溝上（1999）は，“心理学では自我や自己の概念定義が混乱している。今やこのことは常識といえる”と述べている。本論文では，心理学における「自我」や「自己」について，概念使用の整理を行った北村（1977），Allport（1943），梶田（1988），溝上（1999），榎本（1998），沢崎（1984）の論考を参考に，歴史的流れに沿って概念整理を行った後，主に児童期後半から青年期を中心として「自我」「自己」の取り扱われ方について整理を行う。そして，本論文で扱う「私」が心理学の分野における「自我」「自己」の研究のどこに位置づけられる可能性を持つのかを考察する。

①Jamesの理論－主我と客我

心理学における「自我」「自己」に関する議論において，初めに取り上げられるのは，Jamesの理論である。松田（1990）によると，心理学の領域において，自己・自我が研究の対象と自覚されるようになったのは，James（1892，今田訳，1992）にはじまるとしている。

James（1892，今田訳，1992）は，主我（I）を，それまで哲学者たちが論じてきた純粋自我（pure ego）に，客我を経験的自我（empirical ego）に当たるものと考えた。そして，主我について，哲学者は経過的意識状態の背後に不変の実体，あるいは行為者を仮定しており，「霊魂」「先験的自我（私が私というものを知る，その知る仕方を一般に規定するもの（植村，1998）。カントにおいて，様々な経験が可能となり構成される根拠・条件にかかわるさま（大辞林，1988“先験的”の項）。認識の主体としてあらゆる経験に統一性を与える統覚作用の担い手としての自我（榎本，1998）。）」「精神」などは皆，行為者の呼び名であるとした。そのうえで心理学では意識状態のみを扱うべきで，霊魂といった実体的な統一原理を仮定することは不必要であると述べている。

そしてJames（1892，今田訳，1992）は，客我には物質的客我，社会的客我，精神的客我の3つの構成要素を設定した。そのうち精神的客我は，“私の意識状態，私の心的能力，および諸傾向を具体的に集めた全体の意味”としている。そして“われわれの知っている自我の核心，自分の生命の聖域とは，一定の内的状態が持っ

ている能動感”であり，それが“われわれの霊魂という生きた実体の直接の表れであると考えられている”としている。

James（1892，今田訳，1992）のこの指摘は，科学としての心理学の確立のために，哲学的思弁的な心理学が仮定した実態的な心の本質といった問題を拒否すべきだったという背景があった（北村，1977）。しかし現代においても，例えば榎本（1998）はJamesが指摘するように，“考える主体は何かといった問い方をすると，心理学の守備範囲を超えてしまう”としており，専ら心理学の対象は客我の各要素であるとしている。しかし，例えば自分自身に起こった過去の経験には暖かさや親しさを感じ，他人のそれには感じない時には，直接ではないにしろ主体の存在が仮定されているはずであると述べている。このように，Jamesの理論は現在の心理学の考え方にも多大な影響を及ぼしている。

本論文で対象としている「私」の水準は，Jamesが心理学の対象から排除した主我に関する問いであると考えられる。しかし榎本（1998）も指摘するように，この主我とは何かといった問いを立てると心理学の守備範囲を超えてしまい，また答えは見つからない問いとなる。けれども，この問いにどのように一般の人が取り組んでいるかについて検討することは，心理学の守備範囲内だと思われる。

②James以後の「私」に関する研究

James以後，「私」に関する研究は二十世紀前半の心理学において脚光をあびなかった。それは，前述のように，「科学的」心理学の発展のため形而上的ニュアンスを持ちかねない概念を追放する必要があったこと，対象とする事象を分析して要素的なものを求めた構成心理学の隆盛により，意識の体験としての具体的事実自体を見失ったこと，外部からの刺激とそれに対する外的な反応のみに基づいて理論構成を行った行動主義心理学において自己意識の概念がそのなかに入り込む余地がなかったことが挙げられる（梶田，1988）。

しかしその後，Allport（1943）が自我の概念を8種（認識者としての自我，認識対象としての自我，根源的な利己心としての自我，優越動因としての自我，心的プロセスの受動的体制としての自我，目的追求者としての自我，行動システムとしての自我，文化を主体的に組織したものとしての自我）にまとめ，新たな関心を集めた。溝上（1999）は，このうち「認識者としての自我」がデカルトの「われ思う，ゆえにわれ在り」の主語にあたるとしている。

そして1960年前後に新しく人間主義心理学が台頭し，自己意識研究が進展を見せた（梶田，1988）。さらに精神分析学，現象学，社会学といった隣接領域から影響を受けて，自己意識に関する理論的実証的研究成果が蓄積されたとしている。この3つの隣接領域との関わりについて，その歴史的流れを沢崎（1984）も指摘している。まず精神分析を背景とした考え方は，FreudやErikson の自我同一性の理論が上げられる。Freudにはじまる精神分析理論は，自我心理学として理論的な展開を見せ，例えば，Eriksonによる自我発達段階の理論に代表されるような考え方を生み出してきた（沢崎，1984）。ここでの「自我」は力動的観点で，自我機能（小川，1965）としての捉え方がクローズアップされており，臨床家に影響を与えている。この点について梶田（1988）は，フロイト流の過程的な精神装置としての自我と，哲学における認識主体としての自我を，安易に同一視してしまっている心理学者も一部におり，主体としての自我のとらえ方について概念的混乱をもたらしている原因の一つであると指摘している。

第2の現象学的背景を持った流れについては，その代表者としてCombs，Snygg，Rogersが挙げられる（沢崎，1984）。Rogersの来談者中心療法はカウンセリングの諸技法の中で中心的存在である。また自己概念の考え方のルーツはこの現象学的流れにある（溝上,1999）。Snygg & Combs（1949）は「現象的自己（phenomenal self）」を自己への知覚の総称とし，主体のあり方に影響を及ぼすものを自己概念とした（溝上，1999）。そしてRogersは自己概念を“意識にのぼることを許容しえる自己についての知覚の体制化されたゲシュタルト”とした（榎本，1998）。この流れから出てきた自己概念研究について榎本（1998）は，自己概念の機能的側面に関する検討は，客体としての自己についてであるが，同時に主体としての自己の機能を間接的に検討しているものとしている。

第3の社会学的背景を持った流れは，Jamesの客我論をCooleyやMeadといった社会学者が発展させたものである（沢崎，1984）。Meadの自己論（1934）は，「象徴的相互作用」という用語に代表されているように，他者との関わりの中で自己が成立していく過程を重視しており，社会的な存在としての自己をクローズアップしてとらえているものと思われる。榎本（1998）は，MeadのIとmeについて，社会的適応の受動的側面をあらわすのがmeで，自分が反応しやすいように環境を変えていく能動的側面を表すのがIであるとしている。このIを私達は直接知ることはできず，Iが動作を起こした後になってmeとして知ることができるのみであるという。このような流れから役割取得行動や他者認知・対人認知の研究が多くなされてきた（柏木，1983）。また

沢崎（1984）も自己の問題を社会的文脈の中でとらえるパーソナリティの形成や対人関係に関する理論が発展したとしている。

以上のように，James以後の「自我」「自己」研究においては，Allport（1943）の提起した8つの自我のうち「認識者としての自我」の範囲内に，本論文で扱う「私」が理論的に含まれると考えられる。しかしその後の3つの理論的潮流におけるそれぞれの「自我」「自己」は，本論文で扱われる「私」の水準を直接取り扱っているものは見られないように思われる。

③各発達段階における「私」

ここでは発達的観点から「私」の水準について検討を行う。松田（1983）は，「自我」「自己」についての研究の中で「自己意識の発達」という視点が強調されてきた背景には，一つに認知心理学の発達によって自分自身をどのように認知するかという視点を生み出したこと，一つに子どもを各発達段階において自己実現化をとげていく存在と捉えることで，各時期の子どもの自己意識を実証的にとらえることが必須となったことを挙げている。

しかし柏木（1983）は，自己の認識とその発達を扱った研究では，主として自己の認識のどの面を扱っているのか，発達的な視点からどのレベルに焦点をあてているかによって少しずつ異なった用語や表現が使用されていると指摘している。また梶田（1988）は，各発達段階に現れがちな自己意識について，以下のようにスケッチしている。乳児期は「身体としての自己」の意識，幼児期は「何らかの所有主としての自己」「統制対象としての自己」の意識，児童期は「特性群としての自己」「将来の自己」の意識，青年期は「将来の自己」「固有の私としての自己」の意識とスケッチしている。ここではこの梶田（1988）のスケッチをもとに，青年期頃までの「自我」「自己」について概観する。

a）児童期までの「私」

乳児期においては，まず身体的自己の観点から自他を分化させる（柏木，1983）。例えば自分の体に向けた自己刺激的運動（Kravitz&Boehm，1971）や共鳴動作（野村，1980）は自己の身体部位についての感覚運動的な把握の存在を推測し，自己の存在をみずから確認する活動である（松田，1990）。しかしここでは，自己の内容，その心理的な特性は認識の対象とはなっていない（柏木，1983）。

幼児期の自己については，2，3歳では行動的自己概念と身体的自己概念が中心的位置を占め（榎本，1998），5，6歳頃から明確な客体としての自己のイメージを持つようになる（松田，1983）。Keller（1978）は3歳から5歳児を対象に自己の内容を検討し，「○○ができる」といった行為のカテゴリが年齢の上昇に伴って微増し，名前や持ち物が年齢の上昇に伴って減少していることを示している。

児童期から児童期後半（青年期も一部含む）といった発達段階をまたいだ「自己」について，「私はだれ？」という質問に対する自由記述を分析したものや，自己の同一性（例：犬になれるか，別の性になれるか）に対する回答という形で研究が行われている（Guardo & Bohan；1971，Broughton；1978，Montemayor & Eisen；1977，山田；1989など）。これらの研究から，年齢が上がるにつれて，身体的外見などの客観的・物理的特徴によるものから，主観的・内面的特徴への言及へ移行することが見出されている。この「自己意識」の発達について，柏木（1983）は感覚的・知覚的自己から認知的自己への移行とし，松田（1990）はメタ認知水準での多様な視点からの自己把握が可能になってくるものとしている。また榎本（1998）は，他者との区別という観点から，思考内容・イメージといった精神的内容によって，他者と取り替えられない独自なものの認識をもつようになる。つまり身体と心を別と捉えることができるようになり，行為の主体としての自分についての認識が芽生えるとしている。

以上のような乳幼児期から児童期後半までの流れをまとめてみると，行動や持ち物による自己規定から身体的特徴による自己規定，そして心理的特徴による自己規定という流れがあり，その後さらに多面的に自己をとらえられるようになる。ここで扱われている自己規定は主に，自己の同一性や独自性を扱ってはいるものの，自己を他者と区別する観点に特に注目したものと捉えられよう。

b）児童期後半から青年期の「私」

児童期後半から青年期にかけては，それ以前とは異なり，自己の内面を見つめ，他者とは異なる独自の各側面，自己像についての探究が行われるといった言及がよくなされる。児童期後半から青年期の自己を見つめる意識の高まりは，例えばMontemayor & Eisen（1977）の調査結果を取り上げて議論されることが多い。10歳頃の表面的特徴の記述から，やや内面化された，一般的普遍的特性への注目が起こり，それが16～18歳ころにかけて，再び客観的表面的な属性へ目が向けられ，特に存在そのものの基盤としての意味をもってくる（松田，1990による解釈）。また溝上（1999）もこの結果を12歳前後の子どもから，自己を対象化しはじめる自己意識の高まりが確認できると解釈している。また加藤（1987）は“小学校高学年より急速に発達してくる抽象的・論理的思考や社会的関心の拡大によって，独自の内的世界，観念の世界の形成が進行する”と述べている。加藤（1987）

は青年前期を11歳頃から16歳頃までとし，「自己の変化と動揺」の時期としている。この時期は客観から主観へ向かう時期でもあるが，自我の形成はまだ弱く，自信のない不安な時期であるという。

このように児童期後半から青年期の時期は，ある程度抽象的思考が可能となり，自己を見つめる意識が発達してくる。そして，変化と動揺の見られる不安定な時期でもある。またこの時期で注目される「自己の内面を見つめる」といった観点は，主に精神生活の出現や客体としての自己概念における各属性の探求，自分自身をみつめる視点の獲得を扱っているものと思われる。ここでの「私」は冒頭の事例に見られるような「私」の水準を直接的には扱っていない。しかし，以上のような抽象的・論理的思考を行う精神生活の出現や，自分自身を見つめる視点は，冒頭の事例に見られるような水準の「私」が出現するための前提条件としては必要なものだと思われる。

c) Eriksonのアイデンティティの概念

青年期の「自我」「自己」を議論する場合，Erikson (1959) のアイデンティティの概念が取り上げられる。Eriksonのアイデンティティ概念は，Erikson自身の臨床的直観によって形成された，“多重的で統合的な概念（鑪・名島・山本，1977)”であるので，単一の定義を行うことは難しい。表層的に一側面がとり出されると，概念そのものが拡散してしまって，いったい何が問題なのかがわからなくなる傾向がある（鑪・名島・山本，1977)。その中で鑪・山本・宮下（1984）は，アイデンティティの問いは「自分とは何か」「自分はどこから来て，どこへ行くのか」ということに深く関わっており，「人間とは何か」という古くて新しい哲学的主題を心理学的にとらえようとしていると述べている。さらに鑪（2002）は，アイデンティティの主題は，内的には思想・信条による支えと，外的には現実的な支えの両面を持っていなければならないとしている。また無藤（1979）はEriksonの自我同一性について“それ以前の総ての同一化や自己像（～としての自分）をとらえ直し，新たに社会との関連で選択し統合して，ひとつの独特で首尾一貫した全体として作り上げたもの”とまとめている。

さらに福島（1999）は，中学生の同一性の達成度をみようとして意味ある結果が得られなかった経験から，アイデンティティの問題は，臨床的な問題を持たない中学生にとって，まだ考えおよぶことのない，はるかに遠い問題であると述べている。また下山（1981）は，中高校生を対象とした「自分」の確立度の面接調査を通して，「自分」について考えない人（早期適応型）が多いことを示した（中学生は23人中5名，高校生は22人中12名)。下山は「青年期平穏説」「青年期危機説」の並立を念頭においているが，明らかに危機を経験しない人が半数強見られた。高石（1989）はこの下山の研究について，自我同一性の概念が本来青年期後期から成人期へ移行する時の社会的役割の達成に重点を置いたものである以上，この手法が前青年期から青年期初期への自我意識の変容の問題を扱うには限界があると指摘している。

以上から，青年期におけるEriksonのアイデンティティ概念は，自身の自己像を捉えなおし他者や社会との関わりにおける自分の位置づけを明確化しようとする試みであると思われる。しかし青年期前期に相当する中学生にとっては，まだそのような視点は見られないようである。またアイデンティティで問われている「私」は，主に「～としての自分」といった自己像であり，本論文で扱われるような「私」の水準とは異なると思われる。しかしアイデンティティの探求において，自我体験に類似した問いに至る場合も可能性としてはあるかもしれない。

このように，本論文において注目している「私」の水準は，心理学の分野においては，Jamesが心理学から排除すべきとした主我の領域の問題であり，Allportの「認識者としての自我」の範囲内に含まれることがわかった。しかしその後の理論的潮流や発達的流れにおいては，間接的にアプローチしていると思われるものは見られたが，直接検討されているものは見出されなかった。

3．自我体験について

(1) 自我体験に関する理論的レビュー

冒頭の事例のような現象は，心理学において経験的に「自我体験」と呼ばれるものと思われる。自我体験に関する記述は，青年心理学の対象を時期を同じくしてはじめて体系的―心理学的にとらえようとした（Bühler, 1924原田訳1969）SprangerとBühlerの指摘から始まる。Bühler（1924，原田訳1969）は，青年期研究の経験的基礎が必要であるとして，青年期の発達の生物学的基礎の研究を試み，日記資料をもとに思春期の内的生活を記述した。その中でBühler（1924，原田訳1969）は自我体験を“自我が突如その孤立性と局限性において経験される”ものとし，青年期のはじまりの現象と位置づけ，その事例を挙げている。そしてSpranger（1932，土井訳1973）は，「自我の発見」の中に「自我体験」として“個性化の形而上学的根本体験”“主観をそれ自身一個の世界として見出すこと，すなわちつねに孤島のごとく，世界のすべての事物および人間から離れた一個の世界として発見すること”としている。そして，青年はその後あらゆる様式の自己反省を行い，例え

ば「一体自分はなにゆえに生きているのであるか，なにゆえにむしろ一切空ではないのか」といった哲学的沈潜に至ることもあるとしている。子どもの疑問は「自分が生まれない中はどこにいたろう」「自分がまだいなかった時に何があったろう」というようなものであるが，青年の疑問になると，「なにゆえに自分は存在するのか，自分の価値はどこにあるのか」というものになることを述べている。

SpringerやBühlerの考察について北村（1977）は，主観的態度としての自我の概念を設定したことと，青年期における自我の覚醒の現象を明らかにしたことは注目に値すると述べている。そして，SpringerやBühlerが青年期における自我の覚醒として強調したのは，“自我を大海における孤島のように，その他いっさいの事物や人から隔絶した世界として意識することであり，自我と自我でないものの間に超え難い深淵があり，人は最も深いところでは孤独であるという自覚”であると述べている。北村（1977）は，青年期におけるこの自我体験によって，自我の意義が初めて明確にされることを指摘している。また溝上（1999）は，Bühlerの自我体験の記述や事例をもとに自我体験を，“自己が暗黙のうちに抱いていた他者とはこうだという他者概念が，自我の孤立性と局限性という新たな経験とずれたことによって感じるもの”としている。溝上のこの解釈は，自己－他者間の明確な分離の自覚に注目して指摘したものと思われる。

しかし「自我の発見」については，その後様々な解釈がなされている。加藤（1987）は，「自我の発見」を青年が自己内部に目を向け，自己のあり方を模索し，この過程を通して他人と区別される自己の独自性が確認されてくるという意味で用いられていることが多いとしている。それ以外にも“自我と外界との距離が最大限に拡大し，客体から主体の分離過程が最終段階に達した時現れる体験であり，個人化の（形而上学的）基本体験”であるとするもの（Remplein, 1966（野呂1973所収）），“自分の中に，自分を見つめているもうひとりの自分を発見”し，“自分のもっとも中心的な部分（主体的自我）が，それ以外の自分（客体的自己）や自分以外のものから離れて，ポツンと単独で存在することに気づかされる。そして「自分は自分なのだ」という意識が生まれ，自分の位置づけを自分自身の内側に求めるようになる”ことを示しているもの（水口，1989），“無自覚な自己概念や価値の機能に気づき始め”たもの（溝上，1999）などの解釈が挙げられる。以上から，「自我の発見」とは，他者と区別される自己の意識化，主体と客体の分離，自己規定を自身に求める，自己の価値への気づき等と様々に解釈されている。よってSpringerやBühlerが述べている自我体験についても，新たな発達段階への移行に関する様々なものが内包された，一連の体験群といった意味で述べられていると思われる。

そして日本においては西村（1978）が臨床心理学の立場から，自我体験についての考察を行い，自我体験の定義を行っている。西村によると自我体験とは，12～13歳頃に起こる“自分が自分自身であるという，内なる自己との出会いの体験”“一種の啓示的体験”としている。西村（1978）が述べている自我体験は，SpringerやBühlerの示す自我体験の中でもより劇的なもの，啓示的なものを自我体験ととらえ，「この日にこのように思った」といった一つの明確なイベントとして見られるものに注目している。

その後高石（1988）は西村（1978）の定義を受け，Jungの理論を取り入れたうえで自我体験を“意識の中心である自我が，無限の時間的，空間的広がりを持った自己という内的世界の全体性の中にはっきりと位置づけられ，自我が自己と新しい結びつきを獲得して，より高次の統合性に向かう原動力となる体験”と定義した。北村（1977）によると，Jungの理論における「自我」とは，意識野の中心，意識の主体であり，「自己」とは意識と無意識を含む心（Psyche）の全体の主体であるとした。全体的な自我としてのJungの「自己」は，Freudのエスと超自我よりもさらに豊かな内容を含み，霊的な性質を持つものとしている。そして北村はJungの「自己」には，主体的自我とみなされる機能と客体的自己と認められる内容とが区別されないままに収められていると指摘している。つまり高石（1988）の定義における自我体験は，Jung的な意味（意識・無意識，さらに霊魂的なものまで含むものであろうか）での「自己」を主体である自我が発見し，より能動的な内面を形成することにあると思われる。また高石（1988）の捉えようとしている自我体験は，西村（1978）とは異なりいくつかの部分体験の積み重ねとしている。そしてその始まりも10歳頃とし，青年期初期というよりも前青年期の出来事として捉えたほうが適切かもしれないと指摘している。

そして渡辺（1992）は，西村の自我体験の定義について，“「本当に自分は自分か」「なぜ自分は自分か」という問いかけを内に秘めているからこそ，痛切な体験になるのではないだろうか”と述べ，自我体験の核となるものは問いや困惑であることを指摘している。そして渡辺・小松（1999）では，大学生への質問紙調査を基に自我体験を“なぜ私は私なのかという問いを中心に，それまでの自己の自明性が疑問視される体験，および，この困難な疑問に解決を与えようとする思索の試みであっ

て，自己の独自性・唯一性の強い意識を伴うこともある”と定義している。そして渡辺・小松（1999）は，自我体験を児童期の現象と位置づけ，青年心理の枠では捉えきれないとしている。

また，May（1983，伊東訳1986）は実存主義的観点から，存在感の経験（例えばあるケースはデカルト流に「我あり，故に我思い，我感じ，我為す（I am, therefore I think, I feel, I do)」と述べている）を「我あり」体験（“I am” experience）とよんでいる。これは自我体験に関する記述ではないが，自我体験に非常に類似した体験であることが推測される。この体験は，あるひとりの人間の中に存在感（sense of being）が出現してくるありさまを指しており，自我が発達するための前提条件になるものであると述べている。またこの存在感は，主体・客体という2分割以前のレベルで起こるもので，存在は「私は主体である」という意味ではなく，“私は何よりもまず，起こっているものの主体としての私自身を知ることができる存在である”ということであると述べている。

以上のように，自我体験における「私」について，SpringerやBühlerは，“対象的客観的な意味領域に対応する主観的態度としての自我（北村，1977の解釈)”，西村（1978），高石（1988）においてはJungにおける「自己」，渡辺・小松（1999）は哲学的背景を持った「私」を扱っている。そして自我体験初発の時期については，SpringerやBühlerは青年期のはじまりの現象と考察している。そして西村（1978）も児童期の様相を残しつつも青年期前期に起こる現象としてとらえている。しかし高石（1988）は，10歳前後を臨界点としており，青年期以前の時期のものととらえているようである。渡辺・小松（1999）はさらに年齢が下がり児童期としている。よって，自我体験に関する今までの研究は，心理学においてどのような「私」の水準を扱っているのか，発達段階のどこに位置付けされるものなのかが一定しておらず，あいまいなままであると思われる。

(2) 自我体験と精神病理との関わり

ところで，「私」に関する病理的な症状として，離人症状・離人体験が挙げられる。木村（1983）によると，離人症状の主体をなすのは「私がない」という体験で，自己喪失感，感情の喪失感，身体の自己所属感の喪失，外界の非実在観，非現実感，時間・空間の喪失感である。そして，デカルトの「われ思う故にわれあり」に対する異議申し立てであると同時に，私たちの常識が日常自明のこととして疑おうとしない現実の世界のあり方に対する異議申し立てである（木村，1983)。また須永（1996）は，離人感に共通する特徴として，非現実感すなわち現実感の低下がその根底にあると述べている。

また離人症状の初発について笠原（1976）は，離人症者の回顧的報告からプレ青年期（10歳から14歳）の頃に離人体験の初発ないし最初のエピソード的突出が非常に多く見られると述べている。また高石（1988）も，精神医学の分野において，神経症や精神病が成人型の発症へと移行する臨界点が10歳前後の年齢にあることが経験的知見として言われていることを指摘している。そして高石（1989）自身の担当した離人感を強く持ったクライアントがそれに当てはまるとし，これを背景に，一般の青年期の人々を対象に自我体験の調査を行うに至ったと述べている。

以上のように，自我体験と離人症状・離人体験は，その内容や初発の時期に類似点が見られ，関わりが深いと思われる。この点について西村（1978）は，急激な自我体験は自殺や離人体験に陥ったり，心理的危機に陥ったりすることがあると指摘している。また田畑（1985）は，小2で早すぎる自我体験を経てそれを思春期まで未解決のまま持ちこして登校拒否に陥った例を報告している。また，離人症状以外の精神病理との間にも，自我体験は関わりが深い可能性がある。

しかし西村（1978）は，自我体験が離人体験や自殺を伴う危ない体験でありながら，絶対的な安心感とエネルギーを与え，心に個人の独立を支え，その人の一生の方向づけをするとしており，離人感や精神病理的な症状とは一線を画している。本論文においても，ある程度の気分の落ち込みといったレベル以上の精神病理的なものは，自我体験の「乗越え失敗例」「とらわれすぎてしまった例」として捉えられるべきと考える。そして自我体験そのものは，精神病理的なものではないとすることが適切だと考える。なぜなら，冒頭のいくつかの事例や，その哲学的背景にも見られるように，精神病理の文脈ではない分野における問いとして，かなりありふれて見られるものと予測できるからである。

(3) 自我体験に関する実証的研究のレビュー

自我体験の実証的研究に関しては，少ないながら以下の研究が見られる。宮脇（高石の旧姓1984）は，西村（1978）の自我体験の定義を基に自我体験尺度を作成し，児童期から青年期を対象に，自我体験に関する初めての質問紙調査を行っている。また，宮脇（1986）は，小学校3年から6年を対象に「自我体験度尺度」を実施し，小4をひとつの頂点（移行期）としてその後に低下するという結果が得られた。続いて高石（1989）は一般の青年期の人々にとっては，自我体験はいくつかの部分的体

験の積み重ねとしてなされると考え，「自我体験度尺度」を作成して，中学2年から高校3年の女子を対象に質問紙調査を行っている。その結果，中核となる自我体験は10歳～16歳頃に起こる割合が高いことが見出された。

そして渡辺（1992）は，大学生227名を対象に自我体験の例を提示して45例の自我体験の収集を行い（体験率19.8%），自我体験のタイプ（なぜ自分は自分なのか，なぜ他の人間ではないのか，場所と環境の問い・時の問い，私はなぜ生まれたのか，境界例），きっかけ，初発年齢，問いの解決についてまとめている。そして渡辺（1995）では，渡辺（1992）における調査と同様の質問紙を，大学生の両親を対象に調査を行っている。体験割合は67名中34名（体験率51%）で，初発年齢は10歳から20歳がピークとなっている。また渡辺（1996）では，ウパニシャドとデカルトとパスカルによって現象の概念規定を行い，質問項目16項目を作成し，大学生277名を対象に調査を行い，各項目の自由記述例を取り上げ検討している（「なぜ私は私なのか，不思議に思ったことがある」の例として，「道を歩いていて突然，自分は何者でどうしてここにいるのか，と感じた。（小学校低学年初発25歳女）」「なぜ，他の国や他の時代に生まれずこの国のこの時代に生まれたのか，不思議に思ったことがある」の例として，「どうして，私は，いまの時代に生まれたのか。どうして日本人で，こういう姿・形をしていて，こういう名前をしているのか。自分がアメリカ人でアフリカの子どもであってもいいはずなのに…と，考えた。とても不思議で，これが生命の不思議か，と思ったりした。（小学校高学年・中学初発21歳女）」）。さらに渡辺・小松（1999）では，渡辺（1996）の質問項目を修正し大学生への調査結果を行った。345名中初体験95例（体験率27.5%），最印象事例45例，計140例を収集した。そして，「自己の根拠への問い」「自己の独一性の自覚」「主我と客我の分離」「独我論的懐疑」の4つにわけ，それぞれ事例を挙げて考察している。

4．自我体験研究の展望

(1)　自我体験における「私」の水準

ここまで冒頭の3つの事例をもとに，哲学の分野，心理学の歴史的潮流，発達的観点から「私」の水準についての議論を行った。そして，冒頭の3つの事例に相当する「私」の水準は，文法的には「自我（ego）」の範疇に含まれ，哲学の分野における永井（1991）の＜私＞に相当することが示された。そして心理学の分野においてはJames（1892）による主我，Allport（1943）の8つの自我のうち，「認識者としての自我」に含まれることがわかった。そしてこれら事例に経験的に相当するとされる自我体験が，青年期のはじまりとしてよく言及される「自我の発見」の一部から概念的に出発したものの，その後の流れにおいてはそれ以前の児童期に見られる問いである可能性が示され，その位置づけはあいまいなものとなるに至った。

また本論文における「私」の水準が，心理学においてあいまいな位置づけとなっている理由として，心理学における「自我」「自己」概念が混乱していること，自我体験で問われている「私」の水準が，Jamesが心理学の対象から排除されるべきとした主我に関わるものであることが挙げられた。

しかし，本論文における「私」の水準はJamesによる主我に含まれはするが，同義ではないと思われる。またデカルトの「私」の水準にも含まれるが，同義ではないと思われる。この主張を行うにあたり，本論文では「私」について「私1」と「私2」の2つの水準を提起して検討したい。これはデカルトやJamesの二分法（身体と心，主我と客我）とは異なった水準の分け方を提起する意図がある。つまり「私」を，例えば「見る」－「見られる」の観点から全ての「見る」「見られる」事象をどちらかに分けるといった分け方とは異なるものである。

「私1」とは，その人の属性や身体といった諸規定から成る具体的に現在ある個人としての「私」とは独立したもので，“この私という特別なあり方そのもの”と永井（1991）が述べる＜私＞を指す。そして永井の解釈におけるデカルトの「私」に含まれるものである（しかし同義ではない）。魚住（1998）も，デカルトの「私」について“世界も身体も剥ぎ取った純粋な＜私＞，純粋な内面性”と説明しており，永井と同様の解釈をしている。ただここでの問題として，例えばAllportの認識者としての自我について，「認識する」，「考える」，「思う」私といった，「私」の行為を司っている能動主体全般を指している。しかしそのような「認識する」全般が，私1なのではない。私1が指し示しているのは，「認識する」「考える」などの行為を取り払ってもなお残ると私たちが想定してしまう（実際に残るかどうかは別の問題である。あくまで仮定の話である），物理的連続性や心理的連続性なしに存在する「この私」という“視点の開け（永井，1991）”なのである。だからこそ，永井が指摘するように，＜私＞が消滅しても「私」は相変わらず「考え」「認識」することができると想定されるのである。つまり，仮に＜私＞が消滅した後においても認識する主体としての自我は相変わらず保たれることからも，認識者としての自我が即，私1に相当するわけではないことがうかがえる。

そして「私２」とは，「ここにいる，この時代にいる，このような体で，このような特性をもつ」ような「私」をさし，特性・個性・他の人から分ける特徴・肩書き・その人の体，記憶などで説明される。一回限りの現在の自己（今の肩書き，今の時代，今の体，今の居場所）とも言える。そしてこの「私２」は，心理学における自己概念，自己意識研究，様々な種類の自己規定などが含まれる。

このような「私１」「私２」という捉え方を取り入れると，例えば「なぜ私は私なのか」という問いは，「なぜ私１は，ＡさんやＢさんでなく，たまたま私２（この身体をもちこの属性をもつ私）なのか」という問いとなる。渡辺（1997）は，他の誰かに生まれるという想像に対して，ある被調査者から「たとえ“私”として生まれなくとも，どこかで“私”は生きているだろうと思う」という回答を得たことについて，“私”は経験的個人としての自己であり，後の“私”は，経験的属性を超越した，魂としての自己を意味すると指摘している。この回答について「私１」「私２」の捉え方を取り入れると，「たとえ（私１が）私２として生まれなくとも，どこかで私１は生きているだろうと思う」と解釈され，その被調査者が，私１を仮定して回答していることが明確に示されると思われる。渡辺（1997）は「他の人間だったら」という想像に意味があるように思えるのは，身体とは独立の魂といった概念を前提しているからであると述べている。しかし，永井（1991）が指摘するように，魂には隣人がいるので，この場合魂という表現は望ましくないと思われ，「私１」「私２」の捉え方を取り入れることが望ましいと思われる。

(2) 自我体験の定義

本論文では，「私１」「私２」という捉え方を取り入れ，冒頭の３つの事例に代表されるような問いの共通点や他の類似した事例を検討し，自我体験を“「私１」について「なぜ？」という問いや感覚的違和感を持ち始める体験”と定義する。自我体験においては，「私１」という水準の発想をしていること，「なぜ？」という問いを持ち，自ら考えていることが非常に重要であると思われるからである。渡辺・小松（1999）の定義においても，問いがその中心に据えられているが，“問いの結果自己の独自性・唯一性の意識を伴うこともある”として，他者と対比される自己への意識の側面も含めている。この部分は，青年期の「自我の発見」の様々な内容のうち，他者と区別される自己の意識化の側面を想定していると思われる。しかし，本論文における自我体験の問いについては，答えは存在しない。問いに対する一種の折り合いのつけ方として，そのような意識が見られることはあるかしれないが，自我体験の定義に含めるべきではないと考えられるのである。

(3) 自我体験の下位側面

本論文では，前述の自我体験の定義のもと，先行研究や定義に沿った具体例の検討の結果，以下の3つの下位側面を仮に設定した（各下位側面ごとの具体例はTable 1）。

まず第１の下位側面は，「存在への問い」である。この下位側面には，私１そのものへの問いが含まれる。例えば「私１はなぜ私２なのか」といった「私１が私２である必然性（もしくは偶然性）への問い，「私１はなぜ（他の人ではなく）私２なのか」といった私１と他者との関係，「私１はなぜ存在するのか」といった私１の存在理由への問い，「私１は本当に私２なのか」「私１は本当に私１なのか」といった（私１の有無を含めた）私１という存在自体への問いが挙げられる。渡辺（1994）は，自我体験の問いかけの形を(1)「私は本当に渡辺恒夫か」，(2)「私はなぜ渡辺恒夫か」，(3)「私はなぜ私か」，(4)「なぜ，今，ここにいるのか」の４つに分けている。これらの問いを本論文の定義から見てみると，最初の３つの問いは，述語部分は異なるがすべて「私２」に相当すると思われる。よって渡辺（1994）の最初の３つの問いを「存在への問い」の側面にまとめることが適切であると思われる。

第２の下位側面は，「起源・場所への問い」である。「私１はなぜこの時代に存在しているのか」「私１はなぜこの場所に存在しているのか」「私１はなぜこの父母から生まれたのか」といった私１の起源や，私１が時間的空間的に現在の私２の状態として存在していることへの疑問，私１と時空間の関係などが挙げられる。渡辺（1994）の自我体験の4つの問いかけのうち，(4)「なぜ，今，ここにいるのか」はこの下位側面に含まれる。また浜田（1993）は，“長大な時間と広大な空間の一点として自分が生きてあるのだ”という素朴な考えに，子どもがおとなになる過程でめざめてくることを指摘している。これは，（長大・広大な水準での）時間や空間認識は，子どもがおとなになる移行期において，「私」について考え意識する上で重要な役割の一端を担っていることを示している。

第３の下位側面は，「存在への感覚的違和感」である。「私１はなぜ○○という名前（私２の名前）なのか」といった，私１と私２の名前との間の関係，また私１と名前との間の感覚的違和感，「（鏡などで自分を映していて）これ（私２）は自分（私１）であるはずなのに，一体何

Table 1　自我体験の具体例（天谷，2002を改変）

＜存在への問い＞	（問いの形式）
①永井（1996，p64より） ぼくが永井均だったこと，永井均がぼくだったこと，の＜偶然＞性に驚くとき，ある意味で確率的な驚きであるともいえる。なぜなら，その驚きは，徳川家康が＜ぼく＞であったり，ポチが＜ぼく＞であったり…することもできたはずなのに，永井均が＜ぼく＞であった，ということの驚きであり…	なぜ私1は私2なのか
②鈴木（1992より） 僕という人間は鈴木敏昭としてここにいる一個しかない。…すべての人間についてそれはいえる。自分を自覚できるものは，主観的に認識できるのは自分一個しかない。そういうのがたくさん集まっているのだ。それではなぜ僕は僕という人間になっているのか。どういうことなのか。	なぜ私1は私2なのか
③西（1996，p40より） ある人は，「宇宙がわかれば，わたしが存在している意味もわかるにちがいない」と思っていた。しかし，物理学は，宇宙が「いかに」存在しているのかを説明してくれても，宇宙が「なぜ」存在しているのかも，わたしがなぜ存在しているのかも，説明してはくれない。それに気づいたとき，大きなショックを受けた，という。	なぜ私1は存在するのか
④渡辺（1994，p75より） なぜぼくが生まれたのだろう。ぼくがもし友人にうまれたならぼくはだれなのだろうと思ったことがある。	なぜ私1は存在するのか。私1は誰だろう。
＜起源・場所への問い＞	
①小阪（1997，p155より） 私はなぜこの父母から生まれたのかという問いは，最終的には解答不可能	私1はなぜこの父母から生まれたのか
②パスカル（undated／1990，p85より） なぜあそこよりもここにおかれているのか，なぜわたしが生きるために与えられたこのわずかな時間が，わたしの先にあった全永遠とわたしの後につづく全永遠とのどこにも指定されないで，この点に指定されたのかを知らない。	私1はなぜこの時代に存在するのか
③中島（1991より） 私は縄文時代のある私でもよかったし，二十一世紀に生まれるある私でもよかった。イラクに生まれる私でもよかったし，リトアニアに生まれる私でもよかった。男でも女でもよかった。それなのになぜ，1955年11月11日という特定の日に，日本に住む特定の両親から1950グラムで男として生まれた，中島聡という名を冠されたこの私でなければならなかったのか。	私1はなぜこの時代（この時間に）に，ここに存在するのか
④渡辺（1992）の19歳女性の事例 自分はどうしてここにいるのかなあ，この広い宇宙のなかの銀河系の地球という惑星のこの日本の国の中のこの地でどうしていきているのだろうかと漠然と考えた。	私1はなぜこの場所に存在するのか
＜存在への感覚的違和感＞	
①高石（1989）の高校3年女性の事例 鏡を見ていると，自分の顔がふと全く知らぬ何かのように見えます。気がつくと，私の名前も通称も他人が付けたものです。此処にいる私は一体何だろうと思いました。	私1と私2の名前・身体との関係
②中村（1977，p95より） 自分とは，自己とはなんなのか，私は何によって私なのか，というかたちで考えていくなかで，そういう自分と手・足・肩や軀とはどういう関係なのかとふりかえってみると，軀とか身体とかいうものが普段思っていたよりもはるかにわかりにくいものであることがわかる。	私1と私2の身体との関係
③鷲田（1996，p47より） たとえば身体をもたない＜わたし＞がありえないことはあまりに明白であるのに，それでは＜わたし＞と身体とはどのような関係にあるかと問うてみると，じぶんがほとんどなんの確かな答ももっていないことにきづかされる。	私1と私2の身体との関係
④渡辺（1992）の20歳女性の事例 なぜこの私の体にこの精神が宿ったのかがわからない。	私1と私2の身体との関係
＜混合例＞	
①渡辺（1994）の20歳女性の事例 「6歳か7歳くらいの頃，ある晴れた日の日曜日の正午ちょっと前，自宅の二階の部屋にいて，窓からさしこむ日差しをぼーっと見ているときに，「私はどうして私なんだろう。私はどうしてここにいるんだろう」と思った。	
②西（1996，p32より） 私はなぜ，いまここに，このようにして，存在しているんだろうか？	

だろう」といった，私1と私2の身体との間の違和感が挙げられる。ここで身体や名前が特に挙げられたのは，身体・名前と「私」との関係が，私達にとって最も身近であることに由来する。前述で述べた自己意識の発達に関する研究においても，乳児期の自己意識はまず身体的自己からであり，また幼児期における自己では名前や持ち物による規定がなされるように，「自己」の発生と名前・身体との関係がまず注目される。この点について浜田（1992）は自我形成論の中で，“「私」は，身体の働きのうえに発生し，形成される”と述べ，「私」というもののなりたちを考える上で，身体の重要性を指摘している。そして菅（1999）も，思春期の身体と「自己」の関係について，「身体は，“自分というもの”の一部であると同時に，それが宿る器でもある。この器の変化は，当然，そのなかに宿る“こころ”の変化をも呼び起こすことになる」と述べ，両者が密接に関わっていることを指摘している。また「自己」と名前の関係については，梶田（1988）が，乳幼児期において自分や他人を固有の名前で意識し，その名前によって働きかけあったり反応しあったりする過程で，それぞれの名前がその人の自他認識の核としての位置を獲得していくと述べ，乳幼児期において自分や他人を同定する際，名前が非常に重要な意味をもつと述べている。また“真の名前さえ知れば相手を自由にできる，と考えた古代の呪術的発想も，名前こそが各人の独自の実体を指し示す唯一のシンボルである，という事実の重みを思い起こさせてくれる”と梶田は付け加えている。このように，身体・名前については，他のもの以上に私1との間の感覚的違和感や問いを引き起こすものと思われる。

(4) 自我体験の調査法について

①面接法の採用

自我体験の実証的研究については，宮脇（1984，1986），高石（1989），渡辺（1992，1995，1996），渡辺・小松（1999）の質問紙調査が見られるのみである。しかし，ここまで述べてきたように，自我体験は，多様な意味を含む「私」という表現の中の，ある特殊な水準を指し示している。自我体験における私1の水準を被調査者に正確に理解してもらい，調査の意図に沿った回答をしてもらう必要がある。そういった手順が正確に行われているかどうかについて，双方向的なやりとりを行うことができる面接法によりまず確認する必要があると思われる。例えば藤井（1984）が，自由記述において“「私は人間である」と自己を表現する場合，抽象度という点からするとかなり水準の高いものと考えられなくもないが，「人間」という言葉は既に幼児期の間にみられ，それを自己の生来的帰属特性と考えれば，外在－内在次元ではかなり水準の低いものになろう”と述べているように，ある自由記述が得られたとしてもそれが指し示す意味やレベルが異なる可能性もあるのである。また中澤（2000）は，対面しながらの調査により，質問の誤解を減らしたり，不明瞭な回答への追求の質問ができることを指摘している。

また，どのような体験を自我体験とみなすか，自我体験にはどのような下位側面が見られるのかについては，まだ探索的段階にあると思われる。定義やその内容がまだ十分に明らかにされていない現象については，実際の現象を収集し，ボトムアップ的にアプローチする方法が有効であると思われる。この点について山本・林（1975）は，まだモデル化されていない探索的段階にある対象領域に関して，情報収集や実態調査を行ったり，質的なデータを集めるには面接法が有効な手段であるとしている。また最近はやまだ（2001）によって，日常生活の現場からモデル（理論・仮説）を構成する手法も提案されている。自我体験についても，厳密な意味での仮説検証型の研究を進めるには先行研究が少ないという現状がある。したがって，まずは大まかな枠組みだけをまず仮に設定した後，それをもとに被調査者にある程度の自由度をもって体験を語ってもらい，現象を収集する。そしてそれらの現象の検討を通じて，その定義や内容について検討し，大まかな枠組みについても確認・修正するという方法をとることが望ましいと思われる。

②縦断調査の必要性

自我体験の収集にあたっては，被調査者に過去を振り返ってもらい，そのような体験を経たかどうかという形でその報告を収集する方法がとられる。この方法において得られた報告は，必然的に被調査者自身の過去の記憶に依存したものとなる。しかし被調査者が体験当時の内容を忠実に記憶しかつそれを保持したものを報告しているかどうかは疑わしい。この点について榎本（1998）は自伝的記憶（自己物語として構成された自分史としての記憶）は主観的に構成されるものであり，現実に忠実ではありえないとしている。しかし，大事なのはそれが本人によってどのように受け止められているかであり，そうした心的現実のもつ意味を過小評価すべきでないと述べている。よって自我体験に関しても，得られた報告を体験当時の内容を忠実に記憶したものとしてではなく，調査時において過去の体験を被調査者がどうとらえているかといった位置づけを行うべきと思われる。

しかし，過去に存在しなかった体験を後に「体験した」と報告したり，過去に体験を経たにも関わらず完全に忘却し「体験していない」と報告したりする場合は，自我

体験の体験率や調査そのものの信頼性に関わる問題となってくる。自伝的記憶の忘却については，Linton（1982）は自身の日常生活における出来事を記録し評定するという実験を行い，項目が書かれて1年以内の忘却比率は1％以下で，2年目以降は毎年5～6％の安定した比率で忘却が生じていたとしている。また，Cohen（1986）は，学生に書かせた記録を1年後，2年半後に自分のものであるかを確認した結果，1年後は9割を超え，2年半後は8割だった。また一部を改ざんしたものでも，自分のものと勘違いした者が見られたという。

また発達に伴い，その人にとっての重要な出来事が変化することで，自伝的記憶に忘却や変容が見られることもある。Spranger（1924，土井訳1973）は青年時代の情熱と悩みは，自分がその中に立っているうちは無限に重要のように見えるが，後年にはしばしば忘れられてしまうと指摘している。また，北村（1977）は青年期の動揺が後年になって，当時とは著しく異なる意義を持つ場合や，ほとんど無意味に思われることもあると述べている。そして植之原（1993）は，大学生を対象に自我同一性地位によって過去経験の記憶の詳しさや具体性が異なることを見出している。よって自我体験についても，最初の自我体験の後，何度も体験された場合，最初の自我体験の内容とは全く異なる形に変容したり，また発達に伴って体験の持つ意味が変化したりすることが考えられる。

以上のように，自我体験に関する実証的研究では，基本的には調査時点において被調査者が捉えている報告内容を検討するのであるが，劇的な記憶の変容や忘却，（意識的でない）捏造が見られるかどうか，発達に伴いそのような変化が見られるかどうかについては少なくとも確認するべきと思われる。このような点を検討するには，体験初発時に近い時期から縦断調査を行うことが有効であると思われる。

(5) 自我体験の位置づけと今後の展望

自我体験の位置づけとしてまず第一に，自我体験があらゆる人に見られるものなのか，ごく限られた人にしか見られないものなのか，という問題がある。西村（1978）は，自我体験は“客観的な態度を取り得る知性的な強い自我をもった人によって経験され，一般には起こりにくい”としている。しかし高石（1988）は自我体験を“あらゆる人々に普通に起こりうるもの”と述べている。そして渡辺（2002）は，普遍的とは言わないまでもかなりありふれて出現するのではないかと述べている。渡辺の一連の実証的な研究結果や，数多くの事例が散見されることをあわせて考えると，渡辺（2002）の指摘するように，全ての人に見られるとは言わないまでも，一般の人の間でかなりありふれて見られる現象ではないかと思われる。

そして自我体験が一般の人の間でかなりありふれて見られる現象であることを前提としたうえで，第二に自我体験が一過性の現象なのか，発達段階の移行にとって重要な現象であるのか，という問題がある。この点について松田（1986）は，自我体験によって自己意識・自己認知の状態が青年期へ移行するとしている。また松田（1990）は，自我体験にはじまる自己への強い関心が，“自分の中に相対立するいくつかの特性を知覚することでの困惑，自己とは何かを問いかけながらその答を見出せないことへの当惑，自己の中で生じてくる著しい身体的変化を自分のものとして受け入れることができないための混乱，などの危機的状況を生み出したりもする”と述べている。そして西村（1978）は，10歳頃からの主観と客観の間を揺れ動く段階（牛島，1954）における実際の現象として自我体験を位置づけ，安定した青年期後期の基礎として自我体験を据えている。また渡辺（1995）は「自我の発見」が自我体験に相当するものと位置づけており，発達性の現象なのかもしれないと指摘している。さらに渡辺（2002）は自我体験は“ほとんどの場合忘れ去られるが，ある未知の条件が作用した場合のみ，記憶にとどめられ，世界観形成に何らかの影響を及ぼすのかもしれない”と述べている。高石（1988）も，“自我体験をどのように持つかがその後の生き方に大きな影響を及ぼすに違いない”と述べ，自我体験のその後の影響力を積極的に述べている。松田（1990）の指摘は，自我体験を自己そのものへ向かう視点の獲得といった青年期的な心性を生み出す意味で，青年期への移行という位置づけをしていると思われる。一方で西村（1978），高石（1988），渡辺（1995，2002）の指摘は，自我体験をそのような視点の問題だけでなく，その後の世界観や生き方，アイデンティティに影響を及ぼす重要な現象という位置づけを行っている。

以上のような位置づけとは逆に，永井（1991）は“この（自我体験の）問いによって何が変わるわけでもない”と指摘している。自我体験における問いには明確な答えは存在せず，哲学を知らない一般の子どもが何らかの到達点に至ることは不可能に近いと思われる。よって，永井（1991）の指摘のように，表面上は何の変化も見出されないものなのかもしれない。しかし，答えを見出そうと試行錯誤する過程や，問いを立てるということ自体が，その後の視野の広がりと相まって，現実社会や現在の自分自身にとって意味のある知的好奇心や抽象的思考をはぐくむということはあるかもしれない。そういっ

た意味で，自我体験を経た人の中で，自我体験がその後の生き方や世界観に影響を与えている人は存在する可能性も考えられる。また自我体験には，急激で離人症状に近いような重篤なものもあれば，日常的な単なる知的問いといったものもあると思われる。そのような自我体験の深さによって，その後の世界観等に影響を及ぼすような場合もあれば，永井（1991）の指摘するように純粋な知的探求にとどまる場合もあるのではないかと思われる。この点については，自我体験を経た人たちの様子をじかに聞くことで明確化していくべきものと思われる。

そして今後の展望として，自我体験と，児童期から青年期初期にかけての自己意識や認知発達の関係の検討が挙げられる。松田（1986）は，自我体験について，“どのような自己認識の発達や自我発達の経過の中で自我体験が生じてくるのか，またいわゆる青年期に出発点を置いた自我や自己意識についての研究にどのようにつながっていくか，についてはまだ不明確なままである”と指摘している。また特に10歳前後の自我の構造が，発達的な観点からみて不明確であると述べている。高石（1988）も，青年期前期に重点を置いたアプローチの必要性にとって，自我体験研究がその解決の糸口になるのではないかと指摘している。自我体験の初発時期が青年期の初期というよりも前青年期または児童期後半であるということから，自我体験研究は，この時期のいまだ不明確な自己認識や自我発達に関わる研究に新たな知見を提供できる可能性があると思われる。そして一連の「自我」「自己」研究と自我体験の関係を検討することは，心理学における自我体験の位置づけにとっても非常に重要であると思われる。

文　献

Allport, G. W. 1943 The Ego in Contemporary Psychology. *Psychological Review,* **50**, 451-478.

天谷祐子　2002　「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から　発達心理学研究，**13**，3，221-231.

Broughton, J. 1978 Development of concepts of self, mind, reality, and knowledge. *New Directions for Child Development,* **1**, 75-100.

Bühler, Ch. 1921/1967 *Das Seelenlebenn des Jungendlichen.* Fisher Verlag　原田茂（訳），1969　青年の精神生活　協同出版

Cohen, G. 1989 *Memory in the real world.* London: Lawrence Erlbaum Associates. 川口潤・浮田潤・井上毅・清水寛之・山祐嗣（訳）1992　日常記憶の心理学　サイエンス社

大辞林（松村明編）1988　自我（Pp.1032）三省堂

大辞林（松村明編）1988　先験的（Pp.1358）三省堂

榎本博明　1998　「自己」の心理学－自分探しへの誘い－　サイエンス社

榎本博明　1999　<私>の心理学的探求　有斐閣

Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle.* New York: W. W. Norton. 小此木啓吾（訳），1973　自我同一性　誠信書房

藤井虔　1984　青年期の自己概念についての認知発達的研究　京都府立大学学術報告，**36**，169-187.

福島章　1999　1　日本人のアイデンティティ（Pp. 1-11）鑪幹八郎・山下格（編）1999　こころの科学セレクション　アイデンティティ　日本評論社

柄谷行人　1986　探究Ⅱ　講談社

Guardo, C. J. & Bohan, J. B. 1971 Development of a sense of self-identity in children. *Child Development,* **42**, 1909-1921

浜田寿美男　1992「私」というもののなりたち　ミネルヴァ書房

浜田寿美男　1993　個立の風景　ミネルヴァ書房

飯島宗享　1992　自己について　未知谷

池上哲司　1994　1. 自分のなかの他人，他人のなかの自分（Pp.6-25）池上哲司・永井均・斎藤慶典・品川哲彦（編）叢書<エチカ>③自己と他者　昭和堂

入不二基義　1988　一人称問題と独我論　東京大学文学部哲学研究室論集Ⅶ，123-135.

James, W. 1892 *Psychology, Briefer Course.* 今田寛（訳）1992　心理学（上）岩波文庫

Jaspers, K. 1949 Einführung in die Philosophie. Türich: Artemis Verlag　草薙正夫（訳），1954　哲学入門　新潮社

梶田叡一　1988　自己意識の心理学［第2版］　東京大学出版会

笠原嘉　1976　今日の青年期精神病理像（Pp.3-27）笠原嘉ほか（編），青年の精神病理1　弘文堂

柏木惠子　1983　子どもの「自己」の発達　東京大学出版会

柏木惠子　1996　20「自分」とは？（Pp128-135）柏木惠子・古澤頼雄・宮下孝弘（編）発達心理学への招待　ミネルヴァ書房

加藤隆勝　1987　青年期の意識構造－その変容と多様化　誠信書房

Keller, A., Ford, L. H., & Meachan, J. 1978 Dimensions of self-concept in preschool children. *Developmental Psychology,* **14**, 483-489.

木村敏　1983　自分ということ　第三文明社レグルス文庫

北村晴朗　1977　新版自我の心理　誠信書房

小阪修平　1997　自分という「もんだい」　大和書房

Kravitz, H., & Boehm,. J. J. 1971 Rhythmic habit patterns in infancy: Their sequence, age of onset and frequency. *Child Development,* **42**, 399-413.

Linton, M. 1986 Ways of searching and the contents of memory (Pp.50-67). D. C.Rubin (Ed), *Autobiographical memory.* Cambridge: Cambridge University Press.

松田惺　1983　VI24. 自己意識（Pp.640-664）　波多野完治・依田新（編），児童心理学ハンドブック　金子書房

松田惺　1986　自己意識の発達に関する最近の研究　教育心理学年報，**25**，54-63.

松田惺　1990　自己・自我（Pp.210-222）　無藤隆・高橋恵子・田島信元（編）　発達心理学入門Ⅰ：乳児・幼児・児童　東京大学出版会

宮脇恭子　1984　思春期女子における自我体験の様相　日本教育心理学会第26回総会発表論文集，418-419.

宮脇恭子　1986　自我発達における小学校中学年の位置づけ(2)：自我体験度を通して　日本教育心理学会第28回総会発表論文集，372-373.

溝上慎一　1999　自己の基礎理論－実証的心理学のパラダイム－　金子書房

水口禮治　1989　第6章　青年期の人格発達　水口禮治・竹内照宗（編）　青年期までの発達心理学　ブレーン出版

Montemayor, R. & Eisen, M. 1977 The Development of Self-conception from Childhood to Adolescence. *Developmental Psychology,* **13** (4),314-319.

森岡正博　1994　6. この宇宙にひとりだけ特殊な形で存在することの意味－「独在性」哲学批判序説－（Pp.110-132）　池上哲司・永井均・斎藤慶典・品川哲彦（編）　叢書＜エチカ＞③自己と他者　昭和堂

村井潤一　1992　第1章　発達の新しいとらえ方（Pp. 1-59）　村井潤一（編）　新・児童心理学講座1子どもの発達の基本問題　金子書房

無藤清子　1979　「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究，**27**，178-187.

Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society, from the standpoint of a social behaviorist.* Chicago: The University of Chicago Press. 河村望（訳），1995　精神・自我・社会　人間の科学社

永井均　1986　＜私＞のメタフィジックス　勁草書房

永井均　1991　＜魂＞に対する態度　勁草書房

永井均　1996　＜子ども＞のための哲学　講談社現代新書

永井均　1998　＜私＞の存在の比類なさ　勁草書房

中島聡　1991　＜私＞の射程　イマーゴ（青土社）1991年6月号，66-73.

中村元　1989　自己の探求　青土社

中村雄二郎　1977　哲学の現在　岩波書店

中澤潤　2000　8章　調査的面接法の概観（Pp.91-104）　保坂享・中澤潤・大野木裕明（編）　2000　心理学マニュアル　面接法　北大路書房

西研　1996　哲学のモノサシ　日本放送出版協会

西研　1998　第Ⅲ部近代哲学（Pp.111-128）　竹田青嗣・西研（編）　1998　はじめての哲学史　有斐閣アルマ

西村州衛男　1978　思春期の心理－自我体験の考察－　中井久夫・山中康裕（編）思春期の精神病理と治療（Pp.255-285）　岩崎学術出版社

野村庄吾　1980　乳幼児の世界　岩波新書

小川捷之　1965　自我の強さ（Ego strength）の測定に関する研究－その1－　東京教育大学教育学部紀要，**11**，107-122.

Pascal, L. undated *Pensées.* Librairie Hachette. 由木康（訳）　パンセ　白水社

Remplein, H. 1966 *Die seelische Entwicklung des Menschen im Kindes-und Jugendalter.* Ernst Reinhardt Verlag München. Basel, 221-224, 428-443（依田明ほか編　1973　現代青年心理学講座4現代青年の性格形成　第3章自我の形成（野呂正）　金子書房所収）

Rollo May 1983 *The Discovery of Being: Writings in Existntial Psychology* 伊東博・伊東順子（訳）1986　ロロ・メイ著作集　存在の発見　誠信書房

沢崎達夫　1984　自己受容に関する文献的研究(1)－その概念と測定法について　教育相談研究，**22**，59-67.

下山晴彦　1981　青年期における「自分」の確立の研究　東京大学教育学部教育相談室紀要，**4**，109-118.

菅佐和子　1999　4思春期とアイデンティティー親との絆・血のつながりをめぐって（Pp35-48）　鑪幹八郎・山下格（編）　1999　こころの科学セレクショ

ン　アイデンティティ　日本評論社
須永範明　1996　非現実感質問紙の作成　心理学研究，67，86-93.
Snygg, D., & Combs, A. W. 1949 *Individual Behavior: A new frame of reference for psychology*. New York: Harper & Brothers.
Spranger, E. 1932 *Psychologie des Jungendalters*. Quelle & Meyer Verlag　土井竹治（訳），1973 青年の心理　五月書房
鈴木敏昭　1992「自分」という現象の不可思議さ　四国女子大学研究紀要，11(2)，119-212.
田畑洋子　1985　"お前は誰だ！"の答を求めて　心理臨床学研究，2，8-19.
高石恭子　1988　青年期の自我発達と自我体験について　京都大学教育学部紀要，34，210-220.
高石恭子　1989　初期及び中期青年期の女子における自我体験の様相　京都大学学生懇話室紀要，19，29-45.
鑪幹八郎　2002　アイデンティティとライフサイクル論　鑪幹八郎著作集Ⅰ　ナカニシヤ出版
鑪幹八郎・名島潤慈・山本力　1977　自我同一性に関する研究の現況－日本における研究の展望－　広島大学教育学部紀要，27，137-148.
鑪幹八郎・山本力・宮下一博　1984　シンポジアム青年期　自我同一性研究の展望　ナカニシヤ出版
植村恒一郎　1998　Ⅳ定義集　超越論的自我（Pp.212-213.）村田純一（編）新・哲学講義④「わたし」とは誰か　岩波書店
植之原薫　1993　同一性地位達成過程における「事象の記憶」の働き　発達心理学研究，4，154-161.
魚住洋一　1998　Ⅳ定義集　身体（Pp.210-211.）村田純一（編）新・哲学講義④「わたし」とは誰か　岩波書店
牛島義友　1954　牛島青年心理学－日本の青年における自我意識と社会意識の研究　光文社
鷲田清一　1996　じぶん・この不思議な存在　講談社
渡辺恒夫　1992　自我の発見とは何か－自我体験の調査と考察－　東邦大学教養紀要，24，25-50.
渡辺恒夫　1994　4. 世界観の心理学からみた独我論－独我性体験の構造と展開－（Pp.64-89）池上哲司・永井均・斎藤慶典・品川哲彦（編）　叢書＜エチカ＞③自己と他者　昭和堂
渡辺恒夫　1995　再論　自我の発見とは何か－その意義と方法論的問題－　東邦大学教養紀要，27，63-76.
渡辺恒夫　1996　自我体験質問紙作成への予備的調査　東邦大学教養紀要，28，83-99.
渡辺恒夫　1997「私は5億分の1の確率で生まれた」は本当か？－科学心理学からのアプローチ－　科学基礎論研究，88，13-19.
渡辺恒夫・小松栄一　1999　自我体験：自己意識発達研究の新たなる地平　発達心理学研究，10，11-22.
渡辺恒夫　2002　＜私の死＞の謎－世界観の心理学で独我を超える－　ナカニシヤ出版
やまだようこ　2001　現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス　質的心理学研究，1，107-128.
やまだようこ・加藤義信　1998　イメージ画にみる他界の表象－この世とあの世の位置関係－　京都大学教育学部紀要，44，86-111.
山田ゆかり　1989　青年期における自己概念の形成過程に関する研究—20答法での自己記述を手がかりとして—　心理学研究，60，245-252.
山本輝夫・林英夫　1975　第3章　調査的面接法　続有恒・村上英治（編），1975　心理学研究法第11巻　面接　東京大学出版会

（2003年9月30日　受稿）

原　　著

ABSTRACT

An Overview and Analysis of Ego-experience : Questions about " I "

Yuko AMAYA

The purpose of this study was to overview and analyze ego-experience based on children's questions about themselves. Such questions as "Why am I 'I'?," "Why do I exist?," "Where did I come from?," and "Why was I born at this particular time rather than at a different point in time?," along with the feeling that one's appearance is strange, all were determined to reflect ego-experiences. In the first part of the study, the various " I "s were discussed grammatically, philosophically, psychologically and developmentally. Then previous studies of ego-experience were reviewed. As a result, a new aspect of " I " was suggested, and ego-experience was defined from this new aspect. Ego-experience, then, refers to questions about " I " that are independent of a person's physical and psychological identity. The three aspects of ego-experience were found to be as follows: "questions about one's existence," "questions about one's origin or situation," and "a sense of incongruity with oneself". Finally, we considered a method for examining ego-experience and the meanings of ego-experience.

Key words : " I ", Ego-experience, the new aspect of " I ", childhood.